

この時も同じく、意識が遠のいで「あれっ？」となった。

地図でたとえると、自分が何町にいるかはわかっている。ところが、何丁目何番地に
いるのかがわからない。台本も全部頭に入っているし、その場で頭から再現できるのだ
が、いったいどこを演じているのか、いま自分が何をしているのか、それがわからない。

この時は、台本を見れば記憶が戻ると思って、演技をしながら、片方の舞台の袖には
けた。スタッフの誰かに見せてもらおうと思ったのだ。ところが全員、反対側の袖にいた……。

ジタバタした。ジタバタしているうちになぜか、ふーっと記憶が戻って来て、この時
は事なきを得た。

プロの役者として、二十四歳で初舞台を踏んでから、毎年のように舞台に立ち続けて
きた。全国各地、県庁所在地はもちろんのこと、県下第二、第三の都市まで、四十七都
道府県すべて回った。

舞台に生きてきた、といっても過言ではない。六十を過ぎて、その舞台で一瞬とはい
え記憶が飛んだことに呆然自失となった。

早速、毎年検査している脳ドックに向かった。改めて検査してもらったが、専門の先
生は「問題ない」と言う。脳梗塞の兆候もない。血圧は多少高めだが、それも「とりた
てて問題ないでしょう」と太鼓判を押す。「一過性です」と。

とはいえ六十過ぎてのことだ。いつまで生きられるのか。ついその先のことを考えた。
この異変以外は、体も元気だ。

だが、世間で言うところの定年退職の年齢を過ぎ、仕事中に、**虚血性脳貧血**になった。

だいたい、歳を取ると、正直、人間嫌いになってくる。同年配はまだしも、**若い人間
とは話が合わなくなる**。一生懸命世間に追隨して、話を合わせるという手もあるが、私
はその努力の時間が惜しい。だったらひとりでもいい、とってしまう。

ひとは寂しいことだろうか。

私はそう思わない。むしろ、ひとりでいれば、誰かに指図されるということも起こら
ない。

友だちを否定しているわけではない。私も親しい友人と飲むのは楽しい。でも、ずっ
と一緒にいるというのは気が引ける。

ふと意気投合して、

「じゃあ一杯いきますか」

こういうのが好きだ。

居酒屋が好きだ。

なぜかと聞かれると困ってしまうが、あの気取らない佇まいが性に合うのだ。誰もが暖簾をくぐれる気軽さもいい。そして安くて旨い。

居酒屋には、基本ひとりで行く。仲間とワイワイやりながら呑むのも悪くないが、ひとりのほうが気楽でいい。それに、皆で喋っていたら、肴の味を楽しむことができない。

もちろん酒を友だちと楽しむ時もある。

「西萩の会」という会がある。会長は伊東四朗さん。他のメンバーは、佐藤B作、その奥さんでもある女優のあめくみちこ、俳優仲間の松金よね子、そして私。この五人。

・・・

だいたい、仕事仲間と飲むのは面白くない。酒の席に仕事を持ち込まれても困ってしまう。こちらは忘れてたくて呑んでいるのだから。

この時は違った。会話のルールは、「自分たちを褒めあう」。返す刀で、他の人をけなす。直接名前を出さないイニシャルトークだ。

「あれはだめだな」「ほんと、だめになったなあ」とこの調子。もちろん、この時の会話は、決して外に漏らさない。

この最初の飲み会の時、何軒かハシゴしたが、結構酔ってしまった。十以上も年上の大先輩と一緒に呑んだのに、最後のほうの記憶がない。それでも家にたどり着いたが、朝、自分の家のベッドで目覚めて、どう戻って来たのか思い出せない。

その後、お会いした時に、

「伊東さん、僕、あのあとどうやって帰ったか全然わかりません」

と報告したら、喜んでくれた。先輩だからと遠慮されたらつまらない。へべれけに酔うまで気持ちよく呑んでくれたのが嬉しかった、と言われた。

この会は恒例となり、年に二、三回集まるようになった。

ただこのままいくと、自分の部屋はどうなってしまうのかな、という危惧はある。私がいなくなったらどうなるのか。

いちばんの問題は、ブルーレイだ。

私の部屋には、ブルーレイレコーダーが七台ある。さらにリビングに二台。計九台。しかもすべて稼働している。

ブルーレイレコーダーには、それぞれに、NHKのBSプレミアムの映画やドキュメンタリーを録るもの、音楽、旅やグルメ、健康……と一台ごとに役割をわけている。『NHK ウィークリーステラ』を定期購読していて、あれが届くと、早速、録画したい番組に印をつける。そして予約する。

『きょうの健康』（Eテレ）とか、中井貴一くんのナレーションが非常に素晴らしい『サラメシ』（NHK総合）、太田和彦さんが各地の居酒屋を訪ねる『太田和彦 ふらり旅い酒いい肴』（BS11）、東京の街を訪ね歩く『TOKYO ディープ！』（NHK BSプレミアム）……などは毎週録画だ。NHKのBSプレミアムの歴史ドキュメンタリーもいいものが多い。

五十歳を過ぎたあたりから、仕事に関係なく、京都を訪れるようになった。

熊代さんをはじめ、一澤信三郎帆布の一澤さんや、大徳寺（臨済宗大徳寺派大本山）の塔頭寺院・真珠庵の山田宗正和尚など、京都には「大人になってからできた友人」が増えた。

歳を重ねてからできた友人は、距離感が心地好い。皆、大人なので、「ここから先はお互いに踏み込まないようにしましょう」という共通のラインがある。ラインは、いつも一定というわけではなく、時によって近くなったり遠くなったりするのだが、そのラインコントロールが、皆、巧みなのだ。お互いの「ひとり」を大切にし合い、気を遣わせない。

こういうのって、いいなあ。

当然ながら、人生は幸運ばかりとは限らない。

大学時代、ある女の子とつきあっていた。その子とは、ヨーロッパ周遊の団体旅行にも一緒に行った。四十九万八千円。今でも覚えている。さすがに向こうの親も、二人で行かせるわけにはいかないと、「妹も一緒なら」という条件が付いたが、ともかくもOKが出た。

ヨーロッパ十二カ国を、ひと月丸々かけて回った。パリには遍間。エルサレムの嘆きの壁にも行った。ただ、切り詰めての貧乏パック旅行だったので、食事は貧相。毎日、ナポリタンのようなものばかり。パリにいても、フランス料理のフの字も出てこない。

私の友人が、大学を出たあと、結婚してすぐにアメリカのミシガン州に居を構えたが、そこにも彼女と一緒に遊びに行っている。将来を約束したわけではないが、私はずっとそのつもりでいた。

文学座の公演で、京都にいた時のこと。

「子供ができた」

突然彼女から連絡があった。彼女は大学を出たあと、著名な服飾系の専門家の弟子となり、修業をしている最中だった。

京都で彼女と会った。

「あなたの子じゃないの」

今から思えば、二時間ドラマかというぐらいの展開だ。彼女は妊娠の報告と別れ話を切り出すために、京都まで押っ取り刀で駆けつけたのだ。

寝耳に水の私は、彼女の言動に頭がついていかない。現実がうまく把握できないのだ。なぜそうってしまったのか、頭の中は疑問符だらけで、考えもまとまらない。

諦めきれない私は、逃げる彼女を追いかけた。最終的に、子供の父親と私で乱闘になった。乱闘といっても一方的にぶちのめされたのだが……。その時殴られた場所——赤坂の飲み屋の名前を今でも覚えている。

結局、彼女とはよりを戻せずそれっきり。大失恋だ。

その時、頭に浮かんだのは、尾崎紅葉の『金色夜叉』だ。貫一の許嫁(いいなずけ)のお宮が、結婚

直前に、富豪に嫁いでしまうという古典的名作だ。

「来年の今月今夜のこの月を僕の涙で曇らせてみせる」

という貴一の台詞は有名だ。

私は貴一のように彼女を蹴らなかったし、高利貸しになって復讐しようとしたわけではないが、この時、心に誓った。

「絶対に芝居で一人前になって、世の中にちっとは知られる役者になる！」

もし、単純に学生時代の恋人とうまくいって、そのまま結婚して落ち着いてしまったら、これほど強く、「いい役者になる！」という意志を持てたかわからない。大失恋があったから今があると断定することばできないが、役者をやるにあたって、強いバネとなって働いたのは事実だ。

高校時代から演劇部で、大学時代も演劇漬け。人より経験は積んでいる。自分の中で自負も自信もあった。文学座でもいくつもの舞台を経験し、知らず天狗になっていたのだろう。

「自分が思った演技をやれば、お客さんに伝わる」

と思い込んでいた。

ところが違った。

頭で思っていることと、表現していくことば違った。私は、北村さんに頭ごなしに怒られたことで、ようやくそのことに気づいたのだ。

「終活」という言葉もよく耳にするようになったが、はたしてそのことを考えるべきか否か。「くたばる時はくたばるんだから、今から考えてもしょうがない」という気持ちになっている。

だから終活も無視して、最近は、「とことん生きてやる」と息巻いている。自分が死んだあとのことより、今どこまで楽しく生きられるのか、そっちのほうが興味深い。きっとこれからもそうやって生きていくのだろう。今を楽しむのだ。六十九年間の人生、そう簡単に変えられない。